# 中高約10校の生徒 被災地へ

## 自治体派遣や修学旅行 今年県内

東日本大震災の発生から4年半以上がたち、風化への懸念も広がる中、今年は既に県内から約10校の中学校と高校の生徒が自治体の派遣事業や修学旅行などで東北沿岸部を訪れた。滞在期間の短さから、事前学習や訪問後の活動などで苦心する学校も多いが、実際に訪れた生徒らは「訪れたからこそ、自分にも問われる問題だと実感できた。今後も関わり続けたい」と模索する。【久木田照子】

「中学生や幼児も犠牲になったのか」

岡山市の派遣事業で8月、宮城県気仙沼市・杉ノ下地区を訪れた市立岡北中の7人は衝撃を受けた。地区の高台にある慰霊碑には、生徒らと同年代の子を含む犠牲者約90人の名前や年齢が刻まれていた。

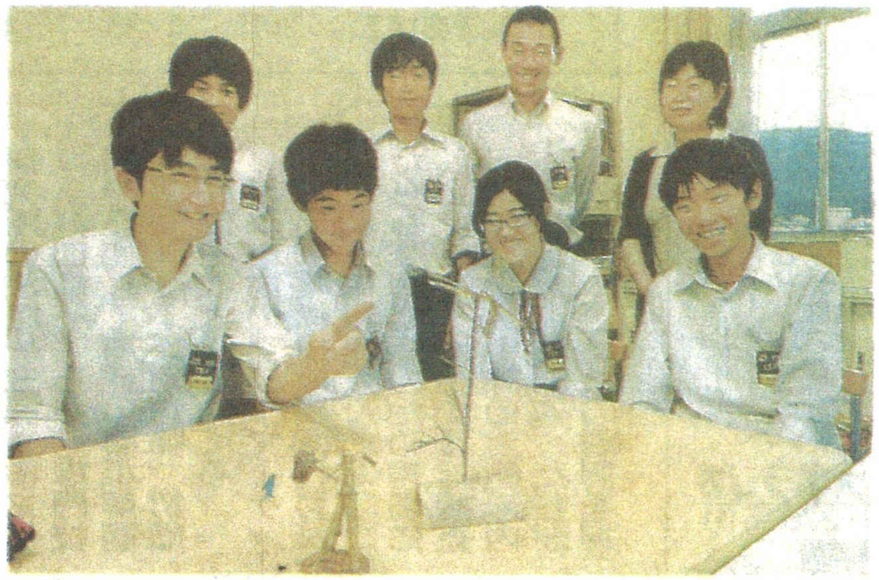
高台だけで50人以上が津波にのまれて死亡し、近くの被災住宅跡は草地のまま。全員が被災地を訪れたのは初めてで、生徒会長で3年の織田優希さん(14)は碑に手を合わせ、「津波が奪ったものの大きさを実感した」。

同市の事業は震災翌年の2012年度に始まり、今年度が最終年度にあたる。毎年、市内の中学校1校の生徒代表が2泊3日で気仙沼市を訪問した。当初の目的はボランティア活動だったが、被害や復興を学ぶ研修に徐々に比重が移った。

ただ、市の担当者や教諭らさえも被災地を訪れた経験がないケースも少なくなく、訪問先の選定や、事前学習・現地活動を考える過程は手探り状態だ。岡北中の場合も引率した教諭は初めての被災地だったという。

同校では事前学習で、津波で親族を亡くした児童の作文が載った道徳教材を使用。訓練の重要さを説く防災DVDも見さん(15)は「直接会わなければ、心情が分からなかった」と振り返る。

訪問先を紹介した一般社団法人「気仙沼復興協会」(気仙沼市)の担当からは「生徒の進級や卒業、引率する教諭の担当替え・異動などもあり、学校として交流を引き継ぐのは困難」との声が上がる。



被災地を訪問後、県内在住の被災者の講演を企画した岡北中の生徒ら。気仙沼市の仮設住宅で、住民に教わって作った小物などで思いをはせながら準備をした＝岡山市北区の岡北中で

同校の園田哲郎教頭は、自宅が流出した岩手県大船渡市の知人を訪ねた経験があり、「現地に行かないと、被害のすさまじさは分からない。同世代の宮城の生徒から学ばせたい」と考えたという。

今年は6月に2年生約120人が、東北・北海道への修学旅行に参加。宮城農の生徒の案内で、津波の被害を受けて撤去された校舎跡などを巡り、仮設校舎で一緒に絵灯籠作りをした。修学旅行から帰った後は、文化祭での展示や震災発生日前後の追悼行事などに取り組む。園田教頭は「修学旅行先としては遠いが、生徒の心に一生残る財産になった」。来年度も訪問する方針だ。

◇

独自に訪問を企画した学校もある。県教委によると、県立高校では今年度、林野(美作市)と岡山南(北区)が修学旅行で、備前緑陽(備前市)が研修で訪問した。被災した生徒が転入したり、教諭・生徒が訪問経験を持つケースが目立つ。

林野高は2013年、神戸市で開かれた「第5回観光甲子園」の本選に出場した際、宮城県農業高(名取市)の生徒が発表した、震災学習を織り込んだ観光プランを聞き、昨年からその内容を修学旅行に組み入れた。

県は今年度、初めての高校生派遣事業を実施した。高校生向け防災講座の一環で、岡山東商と備前緑陽、津山工、総社の4校の生徒計4人が岩手県大槌町に派遣され、同町に拠点を持つ北区の国際医療NGO「AMDA」の協力で、岩手県立大槌高と交流し、海岸清掃などをした。

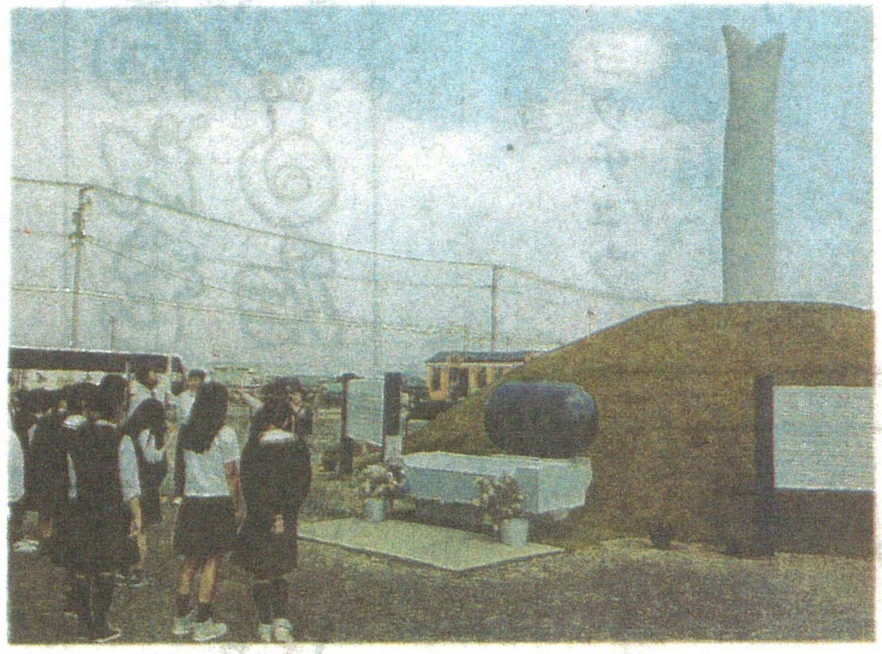
岡山県の現時点の計画では、派遣事業は来年度まで。担当者は「大勢の生徒が参加できれば良いが、予算などの制約がある。地域防災に生かしてほしい」と話している。

## 慰霊碑訪問／仮設住宅で体験談／現地高校生と交流

## 「今後も関係継続を」

東日本大震災

宮城県名取市閖上にある震災犠牲者の慰霊碑を訪ねた林野高校の生徒ら＝6月15日、同校提供



た。他の生徒にも関心を持ってもらおうと、訪問先の被災中学に贈るタペストリーを全校生で作った。

同校の生徒が現地を訪ねたのは8月3～5日。初日は新幹線などで片道7～8時間かけて気仙沼に到着。2日目には仮設住宅で地元住民約20人との交流会に参加したが、体験を語る時の住民の表情は沈んだ。生徒が「なぜ、普段は元気でいられるのか」と問うと、住民からは「元気に協力して生きないと。ここが被害を受けたことを知って帰って」。3年の冨田凌雅者は「風化が進む遠隔地の生徒の訪問で、被災者は『忘れられていない』と勇気づけられる。何らかの形で関わりを続けてもらえたら」と話す。

現地を訪れた生徒たちは2学期に入り、校内の文化祭で体験などを発表。宮城県から瀬戸内市に移住した被災者の講演会も開いた。今後は訪問先とのビデオレターの交換なども検討しているが、生徒の1人は「中学生が自力で関わるのは難しい。高校生になったら再訪問したい」と話す。

同校に限らず、被災地訪問に関わる学校関係者